

聖書: 第一列王記19章1～14節

説教: 主のかすかな細い声

はじめに

ダビデが統一したイスラエルは、ダビデの子ソロモンが亡くなった後わずか数十年で北王国と南王国に分裂してしまい、それぞれが勝手な道を歩んでいきました。今日開いているところは、北王国の七代目の王となったアハブの時代の話です。彼は主を捨てて外国人の女性イゼベルを妻に迎え、イゼベルが拝んでいたバアルと呼ばれる神々を自分も拝みます。そんなアハブに対し神は預言者エリヤを遣わし、アハブの不信仰のゆえにこの国には雨が降らないと宣言して悔い改めの機会を与えますが、アハブは何も変わらない。それから三年が経ち、イスラエルに大飢饉が襲って来たとき再びエリヤが遣わされ、バアルの預言者四百五十人を集めてどちらが本物の神であるか決着をつけようと挑みます。この戦いは、エリヤの大勝利に終わるのですが、アハブは依然として悔い改めようとしません。それでも神は、アハブが悔い改めるのを忍耐をもって待っておられ、悔い改める前に恵みを先取りして雨を降らせたことを、前回見てきました。

今日はその続きです。あれほど大活躍したエリヤが疲れ果てています。そんなエリヤに対し、神はどのようにしてくださったのかを見てまいります。

## 1 エリヤ

### 1) 脅迫を受ける

バアルの預言者たちとの戦いで本物の神が明らかになったとき、周りにいて一部始終を見ていた人たちは、「主こそ神です」と叫び、バアルの預言者たちをキシヨン川で殺したと18章40節にあります。

アハブの妻のイゼベルは事の次第を夫か

ら聞かされ、カンカンになって怒り、24時間以内に絶対にエリヤを殺すのだと脅迫状を送りつけます。

### 2) 自分の死を願う

エリヤはこれを知ると南王国にあるベエル・シェバまで逃げ、荒野でひとりぼっちになるとそこで、死にたいと願うまでになってしまいます。エリヤは弱い信仰者だったのでしょうか。とんでもありません。これまで彼がやって来たことを読めば、彼ほどの信仰者はだれもいないと言って良い。ところが彼は「私は父祖たちにまさっていませんから」と言って完全に自信をなくしてしまいます。今なら「燃え尽き症候群」という病名がつくような状態です。

## 2 語りかける主

### 1) 神の山ホレブ

神はどうされたのでしょうか。ベエル・シェバでエリヤが何もする気がなくて荒野で身体を横たえてたとき、神は彼に触れてくださり、あなたは一人ではない、神が一緒にいるというサインを出します。そうしてから食事を与え、体力の回復を目指します。食べて休息したところで次に神の山ホレブに向かうよう指示を出し、次のステップに進ませます。こうして見ると、弱っている者への神のお取り扱いは実に理にかなっていると思わされます。

このホレブの山のことですが、かつてモーセが主に出会った場所であり、モーセが十の戒めを記した石の板二枚を授けられた場所でもあります。ホレブの山がどこにあるのかについてはいろいろな説があるようです。伝統的にはシナイ半島の先端にある二千メートルを超す山のことではないか

と考えられています。エリヤがいたベエル・シェバからは直線距離にしても五百キロメートルはあって、四十日四十夜歩き通さなければたどり着けない場所でした。

## 2) 「ここで何をしているのか」

やっとの思いでホレブの山に着いたその夜のこと、主の語りかける声を聴きます。

「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

エリヤはこう答えます。「私は万軍の神、主に熱心に仕えました。しかし、イスラエルの子らはあなたとの契約を捨て、あなたの祭壇を壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうと狙っています。」

「私は主に熱心に仕えた」と言っていることは、うぬぼれとか傲慢とかというのではなく、事実そのとおりです。彼は一生懸命がんばってきたのです。ところが事態はどんどん悪い方向に向かい、逆に恨まれ殺されそうになる。こんな理不尽な話はありません。心が折れてしまって生きる気力を失い、もう死んだほうがましだと思ってしまう。

## 3) 同じやりとりが繰り返されているように見えるが

そんなエリヤに主が語りかけてくださる。それはいいのですが、不思議なことがここにある。9節で神が「エリヤよ、ここで何をしているのか」と尋ねられてエリヤは10節で答え、それと全く同じやりとりが13節と14節で繰り返されています。これはどう説明したら良いのか。ある方は、エリヤは神さまの取り扱いに対して鈍感だったので、ただ同じ答えを繰り返しているだけなのだと言っております。本当にそうでしょうか。ご一緒に考えてまいります。

## 3 主とエリヤ

## 1) エリヤが外に出たきっかけ

ここで起きたことを整理してみましよう。神とエリヤの最初のやりとりが9節と10節であった後の11節で主はこう言われました。「外に出て、山の上で主の前に立て。」

では、エリヤはいつ外に出たのか。13節にこうある。「エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい、外に出て洞穴の入り口に立った。」それまではエリヤは外に出ていない。まずこのことを確認しておきます。

なぜすぐに外に出なかったのか。主からの命令はこうでした。「外に出て、山の上で主の前に立て。」

「主の前に立て」です。そうするためには、主がどこにおられるのかさがさなければならぬ。エリヤはこれまで神の奇蹟をいろいろ経験していました。神は天を支配し雨を止めたり降らせたりした。またあるときは天から火を降すということも見てきた。ですから、激しい風や地震、火が引き起きたときも、必ずその中に主がおられるに違いないと考えます。ところがその中に見つけることができなかつた。見つけることができな以上、洞穴の中にとどまるしかありません。

ところがそれからしばらくして、かすかな細い声を聴きます。それを聴いて初めて彼は洞穴の外に出て行きます。そこに主がおられることがわかったからです。その後で、二回目のやりとりが行われます。これがここに書かれている順番です。

## 2) なぜ、かすかで細い声なのか

ここで新たな疑問にぶつかります。なぜ主はかすかな細い声でエリヤに語りかけるのでしょうか。詩篇には「主の声は力強く主の声は威厳がある」（詩篇29篇4節）とあります。主は、普段はかすかな声では語

らない。私たちもそうです。よほどの理由がなければ、はっきりと聞こえるように話します。それでもかすかな細い声で話すのは二つの場面が考えられる。一つは周りに人がいるとき、声を潜めて話すことがある。でもエリヤの場合はあてはまらない。もう一つは自分が弱っているときです。この二月にインフルエンザにかかったときは、私は声も出すのも大変なぐらいの状態になった。ということは、主がかすかな細い声で語ったのは、主が弱っているからということなのではないか。意外でしょうか。もちろん、ここにはそれを裏付ける証拠はここにはありません。

### 3) イエスはエリヤとご自分の最期について話された

そこで福音書を開くと、イエスとエリヤが直接語り合っている場面が出て来ます。ルカの福音書9章28～31節。「これらのことを教えてから八日ほどして、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」

興味深いことにモーセとエリヤはホレブの山に登り、イエスもここで山に登り、この三人は十字架の最期について話しています。これから行こうとしている十字架について、イエスはどんな声で語ったのでしょうか。ゲッセマネの園で、「みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください」と祈らざるを得なかったほどの苦しみです。とても元気な声では語れるものではない。主がエリヤに語りかけたとき、かすかな細い声であったのはこの方が十字架に

おつきになったからだと考えたらどうでしょうか。だから大風の中にも地震の中にも火の中にもおられないことも納得できます。

### 4) 十字架の主に出会う

一見すると同じことを二度繰り返しているようにしか見えなかった主とエリヤのやりとりでした。でももしエリヤが十字架の主にここで出会ったのだと考えれば、この二つは全く異なる意味合いを帯びていることになるのではないかと。

最初のやりとりのとき、エリヤはこう思っていた。「主は天を動かし、火を降すほどの力を持った強い方で常に私たちの上におられる方。いっぽう自分は弱くて、惨めで、こ死んでこの世からいなくなったほうがよい。」

ところが主のかすかな細い声を聴いたとき、がらりと変えられる。主は強くて上にいたのではない。主は弱くて十字架の上につるされていた。その十字架からエリヤに語りかけてくださった。自分だけがこの世からいなくなった方がいいと気落ちしていた。ところが、神である方がこの世から追い出されていく。この世にいるなど、殺されていく。それが私たちの救い主であると、かすかな細い声で教えてくれた。

二度目に問われたとき、エリヤは最初と同じことばを繰り返しています。でも、意味していることが全く違う。エリヤはもう自分のことをくよくよと言っているのではない。主ご自身がやがて十字架でなされることを預言している。それが14節のエリヤのことばではないでしょうか。

惨めだと思っていた自分にさえ、主はご自身の弱り果てた姿を見せて、励ましてくださる。主の豊かなあわれみを思い起こし、御名をあがめます。